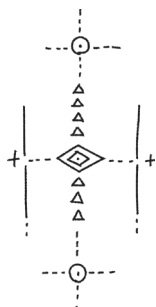


COSMOS集



小島 なお選

「あすなる集」特選

いつも通り

池松 卯月*北海道

クリスマスただ唐揚げを食べるのにいちいち予約せにゃいかんのか
骨付きじゃなくていつもの唐揚げで良いのでいつも通りの店へ
ただケーキ食べるだけなら今日よりもあなたのための記念日が良い
いつもとは違う時間がトコトコといつも通りに過ぎる年末
もつとああしときゃよかつたなどと時間切れですまた来年末

不毛の空き地

山口 清子 群馬

制約のなくてだらりと時はのびなまけものめく独居のわたし
会話なき日々のつづけば脳内にじわじわじわ不毛の空き地
あちこちに家族の写真かざりゐて真綿のやうな過去にまもらる
（三首）をあたためませうと説く女のほそくてながい首気にかかる

ニユース風の称讃でなくてそれぞれのオオタニさんあるおばさん目線

キン 荻原 栄子 埼玉

亡き友の語りしトキの物語天声人語に詳しく読みぬ
人であればおよそ百歳日本の最後のトキにキンはなりたり
獣医師の金子さんに猫のごとキンはなつきし十二年を
コクコクと居眠りをせしトキのキン急に見覚めて飛びてゆきたり
トキのキンの見てゐし夢は何の夢目覚めてケージに衝突死せり

お鍋 吉弘 藤枝 埼玉

お鍋貸してと来し隣人がその鍋にシチューを入れて届けてくれぬ
切干しがあと一日にて仕上がるにその一日が雨となりたり
干し物を外に出さむか長雨の上がる兆しの蜩蝶とぶ
里芋を握る足下に鳩の来て素早くみみずをのどに吸ひ込む
杖をつき巷を行けば温かき飲物いかかと自販機が呼ぶ

つくづく 川添 良子*神奈川

一陣の風の号令にひれ伏しぬ八甲田水蓮沼の草もみじ
つくづくとつくつくぼうしの情深き物言い淋し里の蟬時雨
つくづくと新幹線のはやぶさの速さで遠退く笑窪の兄が
足裏の宙に浮くような足どりのこのさびしさに八十路付き合わん
人影が疾駆していくような風、「密入国禁止」立て札ゆるする

松尾 祥子選

盛岡の町 藤田邦彦*東京

隣から歯を削る音聞こえてきて(つぎは俺か)と観念したり
じやれていた高校生が一斉に立ち上がるときの足の長さよ
橋上に川を見下ろす人群れて鮭遡上する盛岡の町
橋のした背びれを見せて音立てて北上川に鮭遡上する
(トチの実が落ちます)という掲示板 盛岡の町に秋がきました

青いしみ 本土和子*東京

たとえれば胸元につく青いしみあの日あなたが放った言葉
気位の高そうな花鶴首で白きガーベラさつくりと立つ
冬晴れがもつたいなくて人形の赤い着物を洗って干しぬ
目の前でバスはつれなく発車せり忙しそうに車体ゆらせて
山茶花はあたたかき花冬枯れの庭にほんのり紅をちらしぬ

いのちのにおい 高橋梨穂子*新潟

ロシア語でも日本語でもない白鳥のはるかなことばに耳をすませる
爪先の向くほうがいとも前だから好きないろ塗りパンプスに隠す
黒の濃さ濃いほどのちのちのにおいしてからすの影がひとつ飛びたつ
何年も土に抱きしめられていたぬくもり覚えているのか土器よ
心臓を入れて送るのには薄い紙一枚で作る封筒

雪の香り 栗三誌 野*富山

スーパリーのBGMがクリスマスソングに変わる師走朔日
誰にでも仏性あると念じつつ無礼な電話なんかかわす
家々の庭で取れしをいただきぬ富山の地にも育ちし蜜柑
夕暮につないだ君の手の指の硬さがわれの手に残る冬
窓を開け雪の香りを吸い込んでざわめいている気持ち静める

鯉の煮付け 小森鈴子 岐阜

ぐいぐいと土を押しへて金盞花の苗植多やりぬ春思ひつつ
冬鳥の胸毛のやうにふつくらと茶の花咲けり道辺に白く
先のこと思ひて不安になるときは畑に出でて大根を抜く
魚煮る良いにほひだと言ふ孫に鯉の煮付けたつぷりと盛る
わが心ご機嫌にする名人になりたし今日も椿が赤い

斉藤 梢選

夜の家計簿 梅本麻子 三重

正月のなます用にとひとつ残す手作り干柿白く粉ふく
じやらじやらとお釣り出でくるセルフレジ掴みそこねてちやりんと落とす
緊張しセルフレジにてレシートを取り忘れしや夜の家計簿
トルファンで馬上杯なる土産もの買ふとさざめきし友みな世になし
週一度仕事のついでに来て泊まる息子がわれの元氣の源みなもと

「り」 伊藤 たま子 兵庫

用件をスマホに送れば「り」と返す若さらをりぬ 了解と知る
久々に緊張感をあぢはひぬ出す言ひすぎがまんの司会
頑張りて疲れがどどつときたやうな無理はきかぬか八十なれば
けふ誰か来る気配してフルーツのサンドイッチを余分につくる
二の腕を下からゆらし「お餅みたい」満面の笑みで孫はからかふ

同窓会 原田 登美 兵庫

雀荘も角帽店も昭和にて（早稲田通り）はいまグルメ街
そつと聞く五十年目の同窓会に向かひの男性だれたつたつけ
どの顔も学生時代を偲ばせてそれなりに傘寿の記念の写真
十日目に三十五度の焼酎が渋みを抜きてとろり甘柿
手作りのをさななじみの紫蘇の実はプツプツララ歯ごたへかるし

柿のサラダ 古志 節子 島根

薄穂の障子に影の移る午後暮しのなかに生きゆくわれか
石路の花咲く坂をのぼりつつ補聴器に聞く虫の音すがし
そそと咲く秋明菊の白輝りて風のすぎゆく子の家の庭
隣家の柿の実貫ひてサラダにとレタスと共に盛りつけてゆく
神等去出からさでを終へて諸神お立ちより師走九日好天気なり

逃げ道 樺 か乃 広島

一斉に熱き想ひを吐き出した茜の空や瀬戸に陽が落つ

鎮座する五百羅漢に「運命」を聴かせてみたい変身願望
亡夫も子もまだ傍らに居るやうな気配をまよふ銀杏の並木
風のやうに月日のやうに音もなく追ひ越されたり黒きベントツに
楠の大樹こんもり繁る隙間より青空見えて逃げ道のあり
水上 比呂美選

バロメーター 池内 祥子*愛媛

落葉した柿の木鴨の巣を抱きぬ羽が混ざれる精巧な巣を
山寺の紅葉は絵となり詩となりて心の奥にそつと入りぬ
ストーブを焚けば回りに猫二ひきと夫が眠りて夜が更けてゆく
坂道は体調を知るバロメーター今日は息切れ要注意の日
山道で耳を澄ますと猿の声ゆつくり歩くと冬いちごの赤

秋の声 尾花 照子*福岡

秋蝶にあこがれている落葉を蜘蛛の糸よりはすすぐれ
秋風におちた帽子を頭にずのせてぽっぽぽと走る案山子は
落葉は百鬼夜行のようにすぎ羅生門めく夜半の石橋
秋声の清水寺のほそ道に顔を割られて笑む石ほとけ
夕光の紅葉ちりゆく滝つ瀬にみなわの星は生まれ消えたり

絵 暦 大津 慧美子 大分

湯気のなか子らの歓声と共に搗く四年ぶりなるもちつき大会
絵暦の表紙は日の出の色に描く弾けるやうな「夢」の一字

友よりの絵曆陸月に現るる「じつくり」の文字とたをやかな籠
寒き日に義姉はカートを押して来るカートの中に餅米三キロ
デパートの干支の売り場を通り過ぎ引き返して買ふ小さき辰を

母は美人 木場 美枝子 鹿児島

外国を隠れ家にして闇バイトさせる男ら貌の醜し
分らない気力がでない勇気ないメンタル弱きわれと思へり
浜木綿は寂しからずや海遠くわが家の庭につややかに咲く
厄払ひしたはずなのに厄だらけうさぎの年も間なく終はらむ



水上 美季選 「その二集」特選

強き方人 浜野 昌子 北海道

空うめて雪ふりしきる暁よ冬の力の大気に満てり
愉しみは朝の珈琲ひぎの猫ストープを背にものおもふとき
常よりもよによに甘し新しき黒き土鍋で炊きたるごはん
帆立入りグラタン大好き夫のため二人暮らしに八皿つくる
購ひし(全文全訳古語辞典)歌詠むときの強き方人 かたうと

「母は美人、父は醜男だつたよ」と古い母真顔でわれに言ひたり
婆さんのやうに 丸山 克介 鹿児島

十八で始めし髭剃り八十で髭面平気な爺となりたり
迷惑も恥も捨てたる媪たち大声で笑ふ市役所ロビー
年とりて気ままに語り笑ひ合ふあの婆さんのやうになりたし
弟と母の遺骨を故郷に納めてきたり手足動く間に
クレーン車を積むトラックが追ひ越しぬ里に急ぎの工事あるらし

三 国 街 道 畠山 和宏*岩手

魚野川八海山が歌われる堀之内町で深呼吸する
二冊目の「マップ」下さる宮柵二記念館員心やさしも
しんしんと降り積む雪の冬に耐久雁木造りの三国街道
先生の墓前に供花誰が挿しぬセイタカアワダチソウの黄の花
新潟の広袤長く横たわる越後山脈どこまでも沿う

覚えていない 榛原 みよ子*埼玉

母さんの毛糸の茶羽織まだ着てるツギハギ九年暖かいまま

紛争を見ぬふりしつづ晴天にタオルシートをばーんとひらく
心地良き秋のみ空に秋の歌詠みたきものを不意に冬来る
九階の職場の机はあの辺りミッドタウンが上書きしたビル
窓からは日比谷公園皇居あり部長の名前は覚えていない

めぐる 月 谷 真 樹*神奈川

大空をひつじ雲らは西へゆく牧羊犬の風に追われて
樅の木にちさきイエスを飾りつけ降誕祭をうら待つ窓辺
淋しいは鎮守の森を歩くととき寂しいは夜空を仰ぐとき
ガザ地区の空をめぐる月 虐殺を逃れし者が虐殺をする
サーブ打ちし大矢コーチの肩先にテニスボールに似た月残る

ししし 座 清 水 美 里*東京

ウオン・カーウアイ好きなんですと言いたくて全部見ただけまだ好きじゃない
側弯が背骨にありて側弯があなたを許せなくて苦しむ
耳栓をすれば鼓動が煩くてシネシネシネシネ はい、いつか。
ししし座の流星群が、ちかごろは指がふるえてメールが唸る
眠れなくないけど眠りたくなくて霧吹きかけるグリーン、グリーン

狩野 一男選

冬キャンプ 金子 英 子*新潟

雪積もりテント設営前にまず店で雪用シューズを探す
突風でタープは倒れ散らばったベグは凍てつく雪中キャンプ

雪の中焚き火で焼いたマシユマロは甘くもつちりのびてとろける
風強く雲は流れてしるじろと雪原照らす十三夜月
冬キャンプ気温零度の中眠るシユラフにマルカ湯たんぽ入れて

母のつとめ 清 水 由美子*長野

二男坊に添うてくれる娘朗らかで母のつとめをよるこび終える
師走きて東に仰ぐ烏帽子峰は銀髪となる晴天を背に
年末の四ツ谷交番で道問うもお巡りさんも地図で探せり
慈雨のごときチェロの音聴いてつい落ちた涙で知りぬ心の重荷
丁寧な聴診なれば言葉数多くなくても頼れる主治医

泣くこども 池 田 あつ子 愛 知

住む街が突然ガザとなる恐怖つひの住処と決めぬる街が
戦場にひとりぼちで泣くこどもその後知り得ずテレビ見る吾
冬庭に貧乏草と母の呼ぶ青草芽吹く抜かれるために
笑ふから幸せなのだ山茶花は淡き日差しに微笑みてをり
転倒は悪性腫瘍の仕業とそ友の病状日に日に悪化

伏 し 目 小 田 沙也加*愛 知

真贋がすべてでないとしすためあなたに贈るドライフラワー
純愛のクリシエのような一切れのレモンをあなたから遠ざける
性愛が無くても人は生きていくレモンサワーのレモンは輪切り
即詠の無言の時間 伏し目って狙って作る姿勢じゃないし
曖昧な関係性がまた増えて手の振り方を迷ってしまふ

肩肘張らず 田原五郎*京都

ようやくに無事一年が過ぎそうだが、先月のサンタトナカイ不祥事が途切れず、続くこの世界モグラたたきを見ているような学生の服を着ていた正義感いつのまにやら姿を消した。いつまでもアマチュア心で生きてたい好きなことだけ追いかけて目の前のできることでなければいい肩肘張らず自分本位に

大野 英子選

にっこり笑う 木村つや子*奈良

大掃除悩みのタネの換気扇やつと終ったサンタ来る前、師走晴れ光を受けてポカポカと青空見ながら窓ガラス拭く。我が庭を持続可能にするために花屋で探す宿根草を、幼子に作りやりたるアップルパイ作れば夫はにっこり笑う。年の瀬にこの一年を振り返る短歌を続けカタバミに会う

赤白帽 山添聖子*奈良

郵便のバイクの音は遠ざかるポストに小春のぬくもりの本新しい地図の届いた音がしたポストを開ける時のときめき。旅立ちには晩秋、星の美しく見える季節の冒険者わたし。天平のときめきを固めたかたち（雑色瑠璃）は光を宿す。子のはなし半分寝ながら聞いている「赤白帽のゴムひもの味」

アイミスユー 増田柳子*福岡

バイトにてはじめて食品工場のラインに立てり気おくれは封じ餅のつき手とさし手のような緊張感呼吸を乱せばラインが止まる。バイトでも真剣勝負の二十日間別れぎわの「アイミスユー」にきゅん新しいことまた始めようと思わせる若いあなたのアイミスユー。日本はもはやきりもみ状態だ。自信のない男があやつる。

せせらぐ岸辺 白井玲子*佐賀

幻影の母過りたる師走三日ああさうかけふ我が誕生日。この雨に命再び吹き込まれもみち艶めく庭石の上。オフィーリアの亡骸が流れ来るやうな九重男池のせせらぐ岸辺。目印はとらの尾咲く家白壁に紫の花穂ゆらりゆらゆら。願はくば翁かゝ分かるやう綺麗な婆に老いていきまし

さ緑色の子蜘蛛 原万紀*長崎

今活けしキツネナスよりススーとさ緑色の子蜘蛛が下がる。項傾す花つぎつぎに日毎増ゆるすむらさきの皇帝ダリア。石露の花、寒菊、パンジー、黄の色のあかるく冴えて冬に入る庭。咲き垂れるダチュラの花はトランペット庭にひそかな音を奏でる。ケセラセラは亡母の口ぐせ吹く風にかたちを変へて雲は流るる。